「誰が秀秋を松尾山に入れたのか」ではなく、「本人が選んだ」としたら？ 小早川秀秋の意思決定から関ヶ原を再構成する歴史小説、日英同時発売

相良 静は、歴史小説『裏切りの戦略――再考・小早川秀秋』の Kindle 版を、日本語版と英語版（*Betrayal as Strategy*）で2026年10月2日に Amazon で同時に発売します。ペーパーバックは販売中です。

■ 見直しが続く関ヶ原と、残された問い

関ヶ原の戦いは、いまも史料に基づく見直しが続いています。家康が松尾山へ鉄砲を撃ちかけて秀秋に寝返りを迫ったという「問鉄砲」は、同時代の史料に見えず、後世の創作とする研究があります。秀秋については、誰が秀秋を松尾山へ入れたのか（西軍が命じたのか、家康方が指示したのか）、家康方といつから通じていたのかが問われてきました。ただ、入山を命じた同時代の文書は、東西どちらの側からも伝わっていません。

■ 本書の仮説：なぜ「誰かが入れた」と考える必要があるのか

本書は、その問いの一段手前に戻ります。軍を率いる大名が自分の軍を動かしたのなら、別の誰かの指示を仮定する必要はありません。本書は、秀秋が家康の西進を確かめながら、自分で場所と時機を選んで松尾山へ入った、と仮定します。

■ 仮説から見える、戦略の天才としての秀秋

この仮定から、兵力、地形、各軍の配置、家康の進み具合、麓の四家との関係を組み直すと、「決められずに迷っていた若者」とは違う秀秋が見えてきます。去就を最後まで西軍の側に明かさなかったことも、松尾山へ入ったことも、開戦とともに大谷の隊へ向かったことも、家の存続を第一に置いた一つの意思決定として説明できます。本書のモデルに立てば、秀秋は局面ごとに的確な判断を重ねた戦略の天才として読めます。

■ 史料と推論を分けて示す

本書は、新しい史料を見つけたと言う本ではありません。史料で確かめられる出来事は変えず、史料だけでは確定できない意思決定を、ゲーム理論と不確実性の下での意思決定の枠組みで推論し、その筋道を小説として描きました。本編で秀秋の行動を時系列にたどり、分析編でその行動を選んだ理由を説明して、ほかの説と史料に照らして確かめます。資料編では、どこまでが同時代の史料で、どこからが後世の記録、研究、通説、本作の推論と仮定、創作なのかを分けて示します。

■ 書誌

書名	『裏切りの戦略――再考・小早川秀秋』
英語版	*Betrayal as Strategy: Kobayakawa Hideaki and the Game Theory of Sekigahara*
著者	相良 静（さがら せい）
Kindle 版	販売中、¥990（税込）
ペーパーバック	販売中、¥2,200（税込）
英語版 Kindle	販売中
本書のページ	https://sagara-sei.com/books/sekigahara/

■ 著者

相良 静（さがら せい）。歴史上の意思決定を、戦略・制度・ゲーム構造から読み直す。

■ 本件に関するお問い合わせ

相良 静　press@sagara-sei.com